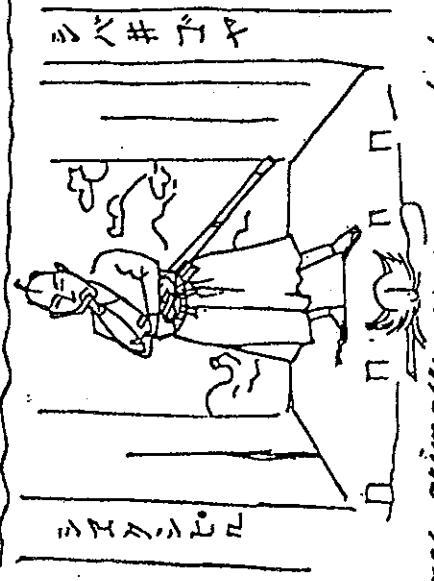


To be, or not to be—that is the question.
 Whether 'tis nobler in the mind to suffer
 The slings and arrows of outrageous fortune
 Or to take arms against a sea of troubles
 And by opposing end them? To die, to sleep: 60
 No more? And by a sleep, to say we end
 The heart-ache and the thousand natural
 shocks
 That flesh is heir to. 'Tis a consummation
 Devoutly to be wished. To die, to sleep.
 To sleep—perchance to dream. Ay, there's
 the rub.
 For in that sleep of death, what dreams may
 come
 When we have shuffled off this mortal coil
 Must give us pause. There's the respect
 That makes calamity of so long life.
 For who would bear the whips and scorns of
 time,
 Th'oppressor's wrong, the proud man's
 contumely,
 The pangs of despised love, the law's delay,
 The insolence of office, and the spurns
 That patient merit of th'unworthy takes,
 When he himself might his quietus make

79

原文 (3幕1場) Alexander, Nigel editor. Hamlet. The Macmillan Shakespeare.
 London & Basingstoke: Macmillan Education Ltd, 1973.

Extract from the new Japanese Drama
 Hamurutei san, "Daimonkai no Kami," proving
 the plagiarisms of English literature of the 16th
 Century



Arimas, arimasen, are wa nan deska :-
 Mushi motto daijoubu atama naka, itai arimas
 Nawa mono to ha ichiban wari takusan ichiban;
 Arui ude torimas muko mudo koto umi,
 Sookte, bokkery itashimas o shunai? Shundayi; news
 Mada; - soekawa, neru de hanashi mo yonoshi
 Koforo itai to iben mainishi bonkoty
 Uchi ototan arimas. sore wa dekinakata mono
 Takusan shimeshita, Shundayi's - neru;-
 Neru! okata nise haikin; sayo akira shoki
 Seranpan?
 Kara ano shundayi no neru, nani nise haikin
 dekinas
 Kono nagai shundayi mono piggy-shimashita,
 Shoki mate seifo:

[[THE JAPAN PUNCH. Yokohama] 明治七年(一八七四)一月]

Yes valet, et plaudite
 Anata syonare, sohta te pompon-

存ふるか……存へぬか……それが疑問ぢや、残忍な運命の矢石を只管堪へ
 忍ぶでをるが大丈夫の志か、或は海なす艱難を逆へ撃つて、睡うて根を
 絶つが大丈夫か？ 死は……ねむり……に過ぎぬ。眠つて心の痛が去り、
 此肉に附纏うてをる千百の苦が除かるものならば……それこそ上もな
 う願はしい大終焉ぢやが……死は……ねむり……眠る！ あゝ、おそら
 くは夢を見う！……そこに障礙があるわ。此形骸の煩悩を悉く脱した時
 に、其醒めぬ眠の中に、どのやうな夢を見るやら、それが心懸りぢや。憂
 世の苦厄を自分と長びかすも、畢竟は此故ぢや。短剣の只一突で、易々と
 此生が去らるるものを、誰がおめくしと忍ぶでをらうぞ？ 世の凌辱や侮
 辱を……虐主の非道や驕る奴隷の横柄や成就はぬ戀の切なき長びく裁判
 のもどかしさ、官吏の尊大面、堪忍すればよいことにして君子大人をも虐
 ぐる小人共が無禮ななどを……死後の危懼でもなくば……誰が此感な世
 に汗を流し伸吟きながら、此様な重荷を忍ぶでをらうぞ？ 曾て一人の旅
 人すらも歸つて來ぬ國が心元ないによつて、知らぬ火宅に往くよりはと現
 在の苦を忍ぶのでがな。……まづ此様に、良心は人を臆病者にならす。ま
 つた決心の本の色は蒼白い憂慮に白ちやけ、如何な大事の企圖も、このゆゑ
 に逸れ、果は實行の名を失ふ。……(オフィリアに目を着けて)や、まて暫し！
 オフィリヤぢやな！……(オフィリアに
 對しなう、姫神、子が罪の消滅をも
 祈り添へてたもれい。

ハムレット このままでいいの、いけないの、それが問題だ。
 どちらがりつばな生き方が、このまま心のうちに
 暴虐な運命の矢弾をじつと耐えしのおことか、
 それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、
 闘つてそれに終止符をうつことか。死ぬ、眠る、
 それだけだ。眠ることによつて終止符はうてる、
 心の悩みにも、肉体につきまとう
 かずかずの苦しみにも、それこそ願つてもない
 終わりではないか。死ぬ、眠る、
 眠る、おそらく夢を見る。そこだ、つまづくのは、
 この世のわずらいからかろうじてのがれ、
 永の眠りにつき、そこでどんな夢を見る？
 それがあるからためらうのだ、それを思うから
 苦しい人生をいつまでも長びかすのだ。
 でなければだれががまんするか、世間の鞭うつ非難、
 権力者の無法な行為、おこるものの侮蔑、
 さげすまれた恋の痛み、裁判のひきのぼし、
 役人どもの横柄さ、りつばな人物が
 くだらぬやつ相手にじつとしのお屈辱、
 この様な重荷をだれががまんするか、この世から
 短剣のただ一突きでのがれることができるのに、
 つらい人生をうめきながら汗水流して歩むのも、
 ただ死後にくるものを恐れるためだ。
 死後の世界は未知の國だ、旅立つたものは一人として
 もどつたためしがない。それで決心がにぶるのだ、
 見も知らぬあの世の苦勞に飛びこむよりは、
 慣れたこの世のわずらいをがまんしようと思ふのだ。
 このやうにも思ふ心がわれわれを臆病にする、
 このやうに決意のもつて生まれた血の色が
 分別の病み蒼ざめた塗料にぬりつぶされる、
 そして、生死にかかわるほどの大事業も
 そのためにいつしか進むべき道を失い、
 行動をおこすにいたらず終わる——待て、
 美しいオフィリアだ。おお、森の妖精、その祈りのなかに
 この身の罪の許しも。

小田島雄志訳『ハムレット』(シェイクスピア全集1)白水社、昭和48年

ハムレット 生きてとどまるか、消えてなくなるか、それが問題
 だ。
 どちらが雄々しい態度だろう、
 やみくもな運命の矢弾を心の内でひたすら堪え忍ぶか、
 艱難の海に刃を向け
 それにとどめを刺すか。死ぬ、眠る——
 それだけのことだ。眠れば
 心の痛みにも、肉体が受け継ぐ
 無数の苦しみにもけりがつく。それこそ願つてもない
 結末だ。死ぬ、眠る。
 眠ればきつと夢を見る——そう、厄介なのはそこだ。
 人生のしがらみを振り捨てても
 死という眠りのなかでどんな夢を見るか分からない。
 だから二の足を踏まずにいられない——それを考えるから
 辛い人生を長引かせてしまふ。
 でなければ、世間が鞭打つあざけりをいったい誰が耐えるだろ
 う。
 権力者の迫害や尊大な者の傲慢無礼、
 報われない恋の苦しみ、裁判の遅れ、
 威張りちらす役人、優れた人物が権え忍ぶ
 くずどもの蔑み。
 短剣でひと突き、
 我と我が手ですべてが清算できるというのに。
 苦勞ばかりの人生の重荷を
 背をくいしはり汗水たらして誰が耐えるというのだ。
 ただ死後にくるものが怖いからだ。
 旅立った者は二度と戻つてこない未知の國。
 その恐怖に決意はくじけ、
 見ず知らずのあの世の苦難に飛び込むよりも
 馴染んだこの世の辛さに甘んじようと思わせる。
 こうして意識の働きが我々すべてを臆病にする。
 こうして決意本来の血の色は
 蒼ざめたもの思ひの色に染まつてしまふ。
 そのため、のるかそるかの大事業も
 潮時を失い
 実行にいたらず終わるのだ。待て、
 美しいオフィリア！ 森の妖精、
 僕の罪の赦しもその祈りにこめてくれ。